

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

# 大坂画壇の絵師たち

## 2. 森派

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が何点か所蔵されています。それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

大坂画壇を代表する流派として有名なのが、今回紹介する森派です。森姓の絵師は安永年間(1772~81)から史料に現れ始め、文化4年(1807)には大坂の画家名鑑である『浪華画人組合三幅対』に周峯、狙仙、徹仙、春溪、雄仙の5人が挙げられるまでになっていました。彼らは優秀な弟子を養子に迎え、血縁や姻戚関係で強く結びつきました。技法的には円山派の影響を受けており、四条派の瀟洒な画風も取り入れて、大坂のみならず京都でも活躍しました。

森雄仙 「琴棋書画図」屏風 紙本淡彩 6曲1双 各162.0×366.0cm

雄仙(1780~1851)は名を君琦、字を季玉、俗称を敬蔵といました。父は写実的な動物画で有名な森狙仙で、最初に画を父に学びました。その後、雄仙は父の兄である森周峯の養子になり、周峯の娘と結婚しました。一方、周峯の実子徹山は、叔

父である狙仙の養子となっています。周峯・狙仙兄弟はそれぞれの子供を交換した形です。実の親子による甘えを排し、厳しい修練を積み、一族の結束を強くする目的があったのかもしれませんが。雄仙の住まいは文化6年刊『浪華画人見立角力組合二幅対』

に過書町、天保年間(1830~44)頃の『浪速諸流画人名家案内』には高麗橋井池とあります。

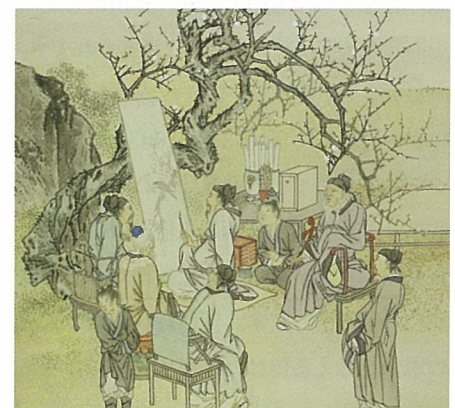
本図に描かれた「琴棋書画」とは、琴・囲碁・書・画のことで、高士のたしなむべき四つの技芸とされました。本図では右隻に後屏の前で琴を弾く人、地面に碁盤を置き囲碁を打つ人々、左隻に詩作にふけり書筆を動かす人、梅に立てかけた画幅に鳥の絵を揮毫する人が配されています。右隻には松と竹、左隻には梅が描かれていますが、吉祥画であることに気がつかないほど風景の中にとけ込んでいます。また人々の仕草にも自然なつながりがあり、豊かな表情からは和やかな会話が聞こえてくるようです。雄仙は現存する作品が少なく、これまで作風も謎に包まれていました。本図のように優れた作品が現れたことにより、雄仙の評価は一新するのではないかと思います。



「琴棋書画図」屏風右隻

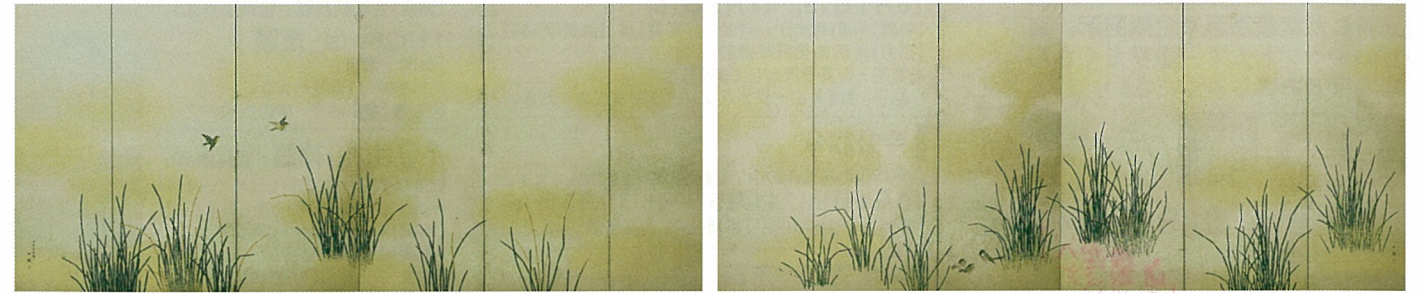


「琴棋書画図」屏風左隻



「琴棋書画図」屏風左隻部分

森一鳳 「木賊に小禽図」屏風 紙本淡彩 慶応2年(1866) 6曲1双 各121.7×296.4cm



「木賊に小禽図」屏風左隻

「木賊に小禽図」屏風右隻

一鳳(1798~1871)は名を敬之、字を子交、通称を文平といました。森徹山に入門し、のちに徹山の娘と結婚して養子となりました。養父となった徹山は、森周峯の子で叔父の狙仙の養子となった人物。自らは実子の男子2人を別家に養子に出し、一鳳と寛齋を養子に迎えて森姓を名乗らせています。一鳳と寛齋の2人は幕末を代表する画家として活躍し、安政2年(1855)にはともに内裏の襖絵を描いています。安政3年刊『浪華名流記』に一鳳と徹山は肥後

細川家の絵師とあり、先述の『浪速諸流画人名家案内』に住まいは淀屋橋とあります。一鳳の絵は洒脱で情趣にあふれ、「藻刈り舟」の絵は「もをかる一鳳」(儲かる一方)と商人に喜ばれたそうです。

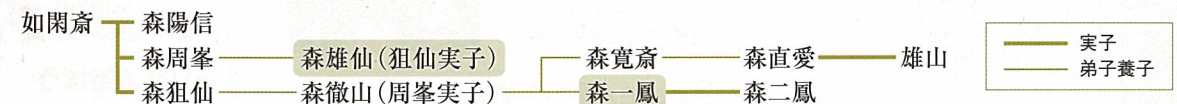


「木賊に小禽図」屏風右隻部分

本図に描かれた木賊は湿地に生える棒状の草、小禽は小鳥のことです。右隻では木賊の陰で、親雀がまだ飛べない子雀に虫を与えています。一方左隻では枯れた木賊の上を、一つがいの目白が飛んでいます。子雀は春、目白は秋の季語であることから、この屏風が春秋を表していることがわかります。雀の親子は写実を基調にしつつ情愛豊かに描かれています。一鳳の作風をよく表した良品といえるでしょう。

(岩間香 摂南大学教授)

### 森派系図



## うら話

### 「唐高麗物屋とネコ」

町家の中で子どもたちに最も人気があるのが、唐高麗物屋の庇にいる2匹のネコ。子どもたちは、展望フロアでこの2匹を見つけるとネコに会いたくて一目散に9階へ急いで降りていきます。カメラを持った方は、必ずシャッターを切るほどの人気ぶり。



当ミュージアムの類似施設として江東区深川江戸資料館を挙げる事ができます。江戸時代の下町を再現した展示で親しまれている博物館です。実は、ここにも1匹のネコがいるの

です。屋根の上に寝そべて、昼寝でもしているのでしょうか。たまに頭を動かすように設計され、その動きが見たくてずっと待っている子どもたちの光景がほほえましいほど。この館は先行施設として、当館も参考にしています。

「あの展示には負けるな」を合言葉に、展示計画が策定されていきました。まず、大坂らしい業種の検討から始めました。多くの意見を総合すると、堂島の米相場や商都大坂らしい両替商を復元町家に再現してはどうかと…。しかし米問屋にしても両替商にしても、店先に米を積み上げていたわけではなく、銭を置いていたわけではありません。ディスプレイは極めて簡素なものとなってしまいます。何を商っているのかさっぱり分からない展示になってしまうのです。

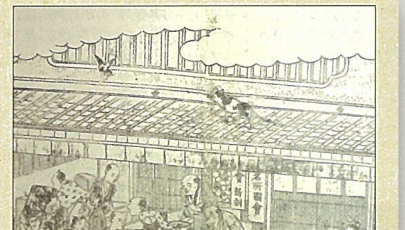
そこで、もっと大坂らしい姿を江戸時代に出版されたさまざまな本などの挿絵に求めていき

ました。そうした書物のひとつに「撰津名所図会」があります。秋島籬鳥著、竹原春朝斎などが挿絵し、寛政年間に出版されたこの中に、たいへん大坂らしい店先を見つけることができました。伏見町に実在した「蝙蝠堂」という唐高麗物屋の店先です。今で例えれば、高級輸入雑貨商といえるでしょう。エレキテルから舶来品まで店先に満載されているたいへん面白い業種であり、当時「撰津名所図会」で紹介されるほど有名なお店であったことがわかります。さらに「撰津名所図会大成」には、心齋橋筋の本屋のにぎわいが描かれ、その庇に雀を追うネコが1匹描かれています。

そうだ。唐高麗物屋の庇にネコを乗せよう。でも1匹じゃつまらない。2匹にして、深川江戸資料館に勝とう。そんなエピソードが2匹のネコにあります。

(学芸員 明珍健二)

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。



「撰津名所図会」の挿絵